

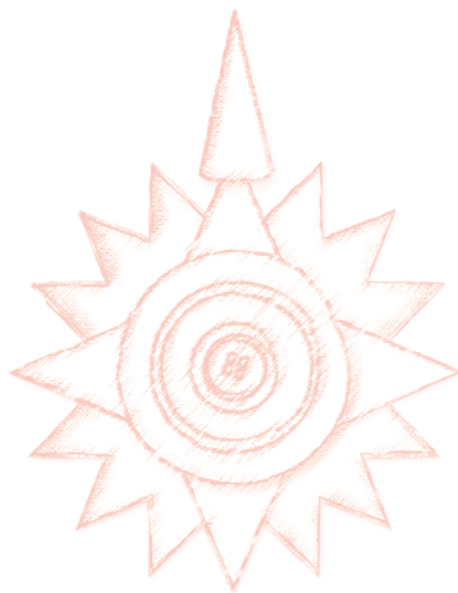


コンパス

音楽表現

編著：駒 久美子・味府美香

共著：疇地希美・荒巻シャケ・甲斐万里子・木下和彦・香曾我部琢
郷津幸男・千葉修平・二宮紀子・早川富美子・藤尾かの子
古山律子・松本哲平・若谷啓子



建帛社
KENPAKUSHA

まえがき

2019（令和31）年4月、新しい教職課程が始まりました。保育者養成にあたる大学等においても、何をどのように指導していくか、これまで以上に授業のあり方に工夫が求められています。その際、いずれにおいてもその中心にあるのは「子ども」であることはいうまでもないでしょう。

本書は、そのことを念頭におき、特に音楽表現において「何を」指導するか、に焦点をあて、音楽表現の学問的な背景や基盤となる専門的事項についての知識や技能、表現力を身に付けることを目指しています。

具体的には、乳幼児の音楽表現の発達、及びそれを促す要因について理解を深め、乳幼児の感性や創造性を豊かにする様々な音楽表現遊びや環境の構成等について実践を通して身に付けることができるような章構成となっています。また、幼稚園教育要領等に示されている領域「表現」のねらいと内容にみられる音楽表現を含みつつ、それ以外にも幅広く柔軟な音楽表現の探究を含めることによって、より専門的な知識・技能等を修得できるような内容にしました。

本書の特徴は、既製の楽曲にとらわれず、自分たちで「つくる」こと、「即興する」ことを中心にしている点にあります。子どもの日常生活や遊びに見られる様々な音を介した表現は、即興的に行われることが多く、こうした子どもの表現を読み取るために、未来の保育者自身も、自分で音楽をつくったり、即興で表現したりするを経験することが肝要です。テキストはあくまでも、その一例であり、本書を活用する皆さんによる新しい音楽表現が生まれることを願っています。

これから保育者を目指す皆さん、現職の保育者の皆さんにも、本書が皆さん自身の音楽的な感性を豊かにする一助となれば、編著者一同喜びに堪えません。

2020年3月

編者代表 駒 久美子

目 次

第1章 領域「表現」とは	1
1 領域「表現」における音楽表現の扱い	1
(1) 領域「表現」の歴史の変遷	1
2 乳幼児の音楽的表現の発達	4
(1) 聴くことの発達	4
(2) 声を出すこと・歌うことの発達	5
(3) モノと関わる・楽器を奏でることの発達	6
3 小学校音楽科教育との連続性	8
(1) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における音楽表現の取り扱い	8
(2) 小学校音楽科の目標及び指導内容	8
(3) 5歳児の事例から読み解く「豊かな感性と表現」	9
第2章 手で奏でる	13
1 手あそびとは	13
2 手あそびを知る・つくる	14
(1) 手あそびはコミュニケーションツール	14
(2) 子どものクリエイティブな力	16
(3) 子どもの発想を面白がって受けとめる	17
(4) 気を付けること	18
3 手話で歌う	18
(1) 手話の歴史	19
(2) 手話で「ともだち」	20
(3) 手話で歌ってみよう	20
第3章 体で奏でる	23
1 体だって楽器	23

(1) 音を鳴らすということ	23
(2) 「体だって楽器」によるリズム遊びが育むもの	24
2 身体表現をとまなう音楽遊び	25
(1) 子ども同士の音楽と体の動きによるコミュニケーション	26
(2) 子どもと大人の音楽と体の動きによるコミュニケーション	26
(3) 時間・空間・エネルギーを感じて	28
3 子どもの表現と現代音楽	29
(1) 現代音楽と「普通の」音楽	29
(2) 子どもの自由な表現にみられる現代音楽の要素	31
(3) 現代音楽と身体表現	31
(4) 図形楽譜を使った身体表現の活動例（年長クラス）	32

第4章 声で奏でる 35

1 声の多様性	35
(1) 表現手段としての声	35
(2) マザリーズという声	36
(3) 保育者としての声を意識しよう	36
(4) 声の多様性を意識するワーク	36
2 声を合わせる	38
3 言葉と音楽	41
(1) 乳幼児期の言葉と音楽の関連性	41
(2) 言葉とイメージ	42

第5章 身近な素材で奏でる 45

1 素材との出会い—身の回りのものすべてが音素材—	45
(1) 保育における素材との出会いの意味	45
(2) ワークからみえてくること	47
2 自然素材で音楽	48
(1) 自然素材と環境設定	48
(2) 竹から音楽へ	49
(3) 貝から音楽へ	50
(4) 自然素材の可能性	51
3 手づくり楽器でアンサンブル	51

- (1) 「自分なり」の音を求めて 51
 (2) アンサンブル—音を介した他者との対話— 54

第6章 環境を奏でる 57

- 1 環境音を聴く57
 (1) 子どもと環境音について 57
 (2) 領域「表現」と環境音について 58
 (3) 環境音と出会う 59
 2 環境音から音楽表現へ60
 (1) 環境音を記録する 60
 (2) 環境音を奏でる 61
 3 サンプリングから映像まで—ICTの活用—62
 (1) 自分のまわりにある音に気付く 62
 (2) 日常の行為に潜む音を意識し、それを使って作品をつくる 63
 (3) 映像と言葉を組み合わせて作品をつくる 64

第7章 楽器を奏でる 67

- 1 ピアノで遊ぼう67
 (1) ピアノで遊んでみよう 67
 (2) 音を聴く（活動人数：1人） 68
 (3) いろいろな弾き方で弾いてみよう（活動人数：1人） 68
 (4) 応答性のある遊び（活動人数：2人） 69
 (5) 黒い鍵盤で即興する（活動人数：2人） 69
 2 打楽器で遊ぼう70
 (1) 打楽器で遊んでみよう 70
 3 アンサンブルをつくろう72
 (1) 聴くこと 73
 (2) 重ねること 73
 (3) 聴くことと重ねること 74
 (4) 自由にやることの難しさ 74
 (5) アンサンブルを楽しむためには 75

第8章 絵本と音楽 77

- 1 絵本と音楽の関係77
 - (1) 絵本に内在する音楽性 78
- 2 絵本で音遊び79
 - (1) 体のウォーミングアップ 79
 - (2) 声のウォーミングアップ 81
 - (3) 楽器を使って 81
- 3 絵本で音楽会82
 - (1) 物語に音楽を付ける 82
 - (2) 乳児向け絵本1冊で1曲 実践例1『びよーん』 83
 - (3) 観客参加型音楽づくり 実践例2『スイミー』 84

第9章 行事と音楽 87

- 1 年中行事にみる音楽87
 - (1) 伝統的な行事を通して 88
 - (2) 文化的実践との出会い 89
- 2 行事における歌唱表現90
 - (1) 発表に向けた音楽劇づくり 90
 - (2) 音楽劇の再創造の過程 91
- 3 行事における器楽表現93
 - (1) 器楽表現の指導の難しさ 93
 - (2) 器楽表現のパラダイム転換 94
 - (3) みんなで合わせる楽しさ 96

第10章 影絵と音楽 99

- 1 影絵の世界99
 - (1) 影絵と音楽との関係 99
 - (2) インドネシアの「ワヤン・クリ」 100
 - (3) ジャワのガムラン音楽の特徴 101
- 2 影絵と音楽102
 - (1) 「みたて」ること 102

- (2) 1つの素材を変化させる 103
- (3) 白と黒 103
- (4) 逆説性の面白さ 104
- 3 影絵音楽をつくる104
 - (1) 影絵を図形楽譜として音楽をつくろう 104
 - (2) 1つの素材から音楽をつくろう 105
 - (3) 白と黒の音楽 (=白鍵と黒鍵を使った音楽) をつくろう 106
 - (4) 逆説性で広がる音楽 106
 - (5) 日本の「カゲ」違いの音楽 107

第11章 日本の音楽・世界の音楽で遊ぶ 109

- 1 日本の音楽をもとに109
 - (1) 箏コンサートと環境設定 110
 - (2) 爪, 柱, 箏との出会い 110
 - (3) 箏と遊ぶ 111
 - (4) 子どもと箏の可能性 113
- 2 世界の音楽をもとに113
 - (1) なぜ世界の音楽に着目するのか 113
 - (2) 世界の音楽の面白さとは 114
 - (3) 子どもたちと世界の音楽を楽しむために 114
- 3 文化としての音楽116
 - (1) 文化とは何か 116
 - (2) 文化と子どもの音楽 117

第12章 音楽教育メソッド 121

- 1 ダルクローズのリトミック121
 - (1) ダルクローズのリトミックが目指すもの 121
 - (2) ダルクローズのリトミックにおける3つの柱 122
 - (3) 保育におけるリトミックの活用と課題 123
- 2 コダーイとわらべうた124
 - (1) ゾルターン コダーイ—音楽は万人のもの— 124
 - (2) コダーイ・システム 124
 - (3) わらべうたが育むもの 125

(4) わらべうたが育む音楽的発達	125
3 オルフの音楽教育	127
(1) 作曲家カール オルフ	127
(2) エレメンタールとオルフ・シュールベルク	128
4 モンテッソーリと音楽	130
(1) 現代におけるモンテッソーリ・メソッドの音楽カリキュラム	130
(2) モンテッソーリ・メソッドにおける音楽活動	131
特別コラム 「あそび歌」づくりの秘訣	135
資料1 音楽のしくみ：はじめの一步ー子どもの音楽表現を支えるためにー	139
資料2 幼稚園教育要領，保育所保育指針，幼保連携型認定こども園 教育・保育要領 「表現」に関わる部分の抜粋	143
索引	147

第1章 領域「表現」とは

本章では、領域「表現」において、音楽表現がどのように取り扱われているか、歴史的変遷や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連等を通して理解する。さらに、乳児期の音楽表現の発達や、領域「表現」と小学校音楽科教育の学びが、どのように連続しているのかについて理解を深める。

1 領域「表現」における音楽表現の扱い

(1) 領域「表現」の歴史的変遷

幼稚園教育要領*¹（以下、教育要領）は、1956（昭和31）年に刊行され、1989（平成元）年の改訂まで、保育内容は「健康」「社会」「自然」「言語」「絵画制作」「音楽リズム」の6領域であった。1956（昭和31）年の改訂では、「望ましい経験」を6つの「領域」に分類整理し、指導計画の作成を容易にするとともに、各領域に示す内容を総合的に経験させることとして小学校以上における教科との違いを明示した。さらに、保育内容を領域によって系統的に示すことにより、小学校との一貫性について配慮していた¹⁾。1989（平成元）年には、① 幼稚園教育の基本を明確に示すことにより、幼稚園教育に対する共通理解が得られるようにすること、② 社会変化に適切に対応できるように重視すべき事項を明らかにして、それが幼稚園教育の全体を通して十分に達成できるようにすること、という2つの観点から全面改訂を行った¹⁾。それによって保育内容は、ねらいや内容を幼児の発達の側面からまとめて「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域となり、幼稚園生活の全体を通してねらいが総合的に達成されるよう「ねらい」と「内容」の関係を明確化した¹⁾。この改訂に合わせて、1990（平成2）年には保育所保育指針（以下、保育指針）も改定さ

*1 1956(昭和31)年以前の保育内容については、1899(明治32)年に「幼稚園保育及設備規程」として日本で初めて保育内容が定められた。そこでは「遊嬉」「唱歌」「談話」「手技」の4項目があげられていた。その後、1926(大正15)年には「幼稚園令」が發布され、先にあげた4項目に「観察」と「等」が加えられた。さらに1948(昭和23)年には、保育要領が刊行され、ここでは保育内容は、楽しい幼児の経験として12項目が示された。

1) 文部科学省「幼稚園教育要領改訂の経緯及び概要」

れ、3歳以上児の保育内容については、教育要領と同様に5領域となった。その後およそ10年毎に改訂（定）されることとなり、教育要領の改訂とともに、保育指針も改定され、2017（平成29）年には、教育要領、保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、教育・保育要領）が同時に改訂（定）された。

（2）領域「表現」のねらい及び内容と育みたい資質・能力、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関係性

保育内容が5領域によって示されていることはすでに述べたが、各領域では、それぞれ「ねらい」と「内容」によって幼児の発達をとらえている。「ねらい」は、幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児の生活する姿からとらえたものであり、「内容」は、ねらいを達成するために指導する事項である。幼稚園教育において育みたい資質・能力とは、平成29年版教育要領に新たに示された3つの資質・能力、すなわち、（1）豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分ったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」、（2）気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」、（3）心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」である²⁾。そして、これらの資質・能力は、各領域の「ねらい」及び「内容」に基づく活動全体によって育むことが明記されている。さらに、こうした「ねらい」及び「内容」に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時^{*2)}の具体的な姿を示したものが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」である。これは、保育者が指導を行う際に考慮するものである。つまり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は到達目標ではなく、子ども一人一人の発達や遊びを通して、5歳児後半までに育みたい姿なのである。これは、3歳、4歳、さらには乳児期からの全体を通して育まれることを理解し、子どもの発達段階に応じて、ふさわしい指導を積み重ねていくことが大切である。

2) 文部科学省『幼稚園教育要領』（第1章第2）2017。

保育指針では第1章第4、また、教育・保育要領では第1章第13に示されている。

*2 保育指針では「小学校就学時」、教育・保育要領では「幼保連携型認定こども園修了時」と示されている。

（3）領域「表現」における音楽表現の扱い

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」には、「健康な心と体」、「自立心」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」、「思考力の芽生え」、「自然との関わり・生命尊重」、「数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚」、「言葉による伝え合い」、「豊かな感性と表現」の10の姿が示されている。このうち、領域「表現」と最も関わりが深いと考えられるのは「豊かな

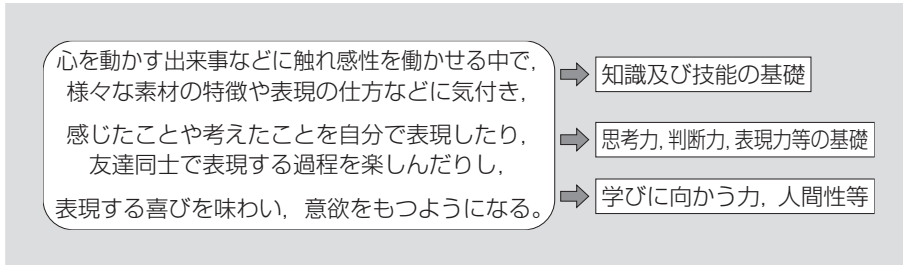


図1-1 「豊かな感性と表現」と3つの資質・能力

感性と表現」である。この「豊かな感性と表現」を3つの資質・能力からみると、図1-1のように読み取ることができる。

1989（平成元）年改訂以前の教育要領における領域「音楽リズム」では、例えば「役割を分担したり、交替したりなどして、楽器をひく」³⁾や「知っている旋律に自由にことばをつけて歌う」³⁾等、子どもの具体的な表現の姿があげられていたが、平成29年版教育要領の領域「表現」の「内容」ではそうした具体的な姿はあげられていない。「(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」⁴⁾と示すにとどまっている。それは「内容の取扱い(3)」に「表現する過程を大切に自己表現を楽しむように工夫すること」⁴⁾とあるように、子どもたちが遊びや生活のなかで、様々な経験を積み重ね、感じたことや考えたことを様々に表現しようとする、その表現する「過程」が大切であるからである。そのため、「内容」の「(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする」⁴⁾のように、子どもたちが生活のなかで経験するもの・ことを、音楽表現だけにとどまらず、身体表現や、造形表現も含んだ多様で総合的な表現として育むことが大切である。

3) 文部科学省『幼稚園教育要領』（第2章表現）1989.

4) 文部科学省『幼稚園教育要領』（第2章表現）2017.

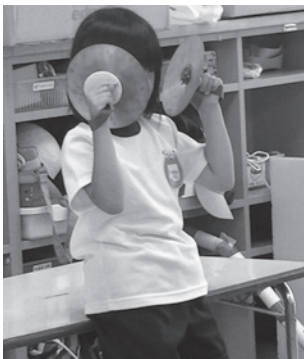


写真1-1 シンバルの響きを楽しむ



写真1-2 手づくりピアノで楽しむ

2 乳幼児の音楽的表現の発達

平成29年版保育指針では、乳児保育に関わるねらい及び内容として、① 身体的発達に関する視点として「健やかに伸び伸びと育つ」、② 社会的発達に関する視点として「身近な人と気持ちが通じ合う」、③ 精神的発達に関する視点として「身近なものに関わり感性が育つ」という3つの視点が定められている⁵⁾。保育者は、これらの視点を意識しながら乳幼児の音楽的表現を支えることが重要である。ここではまず、乳幼児と音・音楽との関わり方の基盤となる、胎児期から発達する「聴力」、すなわち音を聴き取る力の発達からみていこう。

(1) 聴くことの発達

乳児は出生するまで、母親の胎内に約40週いるが、胎児期から、視覚を除くその他の感覚系（皮膚感覚、平衡感覚、嗅覚、味覚、聴覚）はすでに成熟した状態にあるといわれている。胎児の聴覚は、受精後24週頃には完全に機能するようになり、27週目以降には外界の音に対して反応することが明らかになっている⁶⁾。胎児は、母親や胎児自身の心臓や血管の音、消化管の音等の母体内の音と、人の声や音楽等の母体外の音が聴こえている。ただし、胎児は、子宮内背景音と呼ばれるきわめて特殊な音環境にいるため、音の聴こえは、私たちと異なる。子宮内で起こる音あれば、走行中の乗用車の車内の騒音レベルと同程度の、ある程度大きな音として聴こえている。一方、外界の音は、母体と羊水によって大幅に弱められるが、胎児は、このような音環境の中にあっても、特定の種類の音を区別して聴き取っているといわれており⁷⁾、とりわけ母親の声を好む傾向が出生前から見られることが明らかになっている⁸⁾。例えば、出産予定日近くの胎児は、母親の声を聴くと2分間心拍数が増えるが、知らない人の声を聴いた時には減る。また、新生児は、知らない女性の声よりも母親の声の方を好む姿が見られる。こうした母親の声の認識は、母親の声に対して明確な反応を示すことが胎児期からすでに始まっていることと関係している⁸⁾。

このように、胎児期からとりわけ母親の声に敏感に反応することが明らかになってきているが、出生後に乳児が特に好むのが、母親によるマザリーズである⁹⁾(第1章コラム参照, p.11)。その声は、やや高い音声で、抑揚が非常に大きい話し方という特徴をもつ。歌い掛けるようにして語り掛けるマザリーズによって、乳児は、養育者との間に愛着を形成すると同時に、人の声の変化を楽しむようになる。このような乳児の姿は、音楽性の芽生えと見なすことができる。

5) 厚生労働省『保育所保育指針』(第2章 1)2017。

6) ジャック ヴォークレー、明和政子監修、鈴木光太郎訳『乳幼児の発達－運動・知覚・認知－』新曜社、2012、p.52。

7) 前掲書6), pp.54-55。

8) 前掲書6), p.96。

9) 呉東進『赤ちゃんは何を聞いているの？－音楽と聴覚から見た乳幼児の発達－』北大路書房、2009、p.10。

また、近年の保育の世界では、楽音（楽器音や歌声）のみならず、自然の音や機械音、生活音、音声のイントネーション等、ものや人が関わって生み出される音を音素材と見なし¹⁰⁾、それらを耳から感受することが、子どもの音楽的な感性を育むために大切であるといわれてきている。このことについて、吉永は、子どもは表現活動の中で、内面に記憶された様々な事象や情景を思い浮かべ、それらを新しく組み合わせながら、想像の世界を歩き来することを楽しんでいると述べる。すなわち、想像の世界を構築するプロセスに、「音」の感受が介在するのである¹¹⁾。保育者（幼稚園教諭・保育士・保育教諭をいう）は、「聴くこと」それ自体に意識的になり、子どもが様々な音素材と関わることができるような環境を準備しよう心掛けたい。



写真1-3 氷の音を聴く
(3か月)

10) 無藤隆監修, 吉永早苗著『子どもの音感受の世界-心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探求-』萌文書林, 2016, p.22.

11) 前掲書10), p.19.

(2) 声を出すこと・歌うことの発達

乳幼児期の子どもは、既存の歌を歌うだけでなく、生活の様々な場面で歌う姿が見られる。そしてそれは、乳児期からはじまる音声や言語の発達と密接に関わっている。以下に、それらを概観する。

子どもに初めての有意義語（以下、^{しよご}初語）が現れるまでの1年間は、次の5つの段階に分けられる¹²⁾。第1段階（0～1か月）は、ほとんどが呼吸に伴って発せられる反射的な発声や不快な泣き、叫びである。第2段階（2～3か月）は、喉の奥をクーと鳴らす「クーイング」と呼ばれる発声が見れる。また、大人の発声に対して、声を出して反応するようになる。第3段階（4～6か月）は、「ヴォーカルプレイ」（声遊び）の時期とも呼ばれ、金切り声やうなり声、唇を震わせて鳴らすブーブー音等、様々な音声を発するようになり、それを子ども自身で楽しむ姿が見られる。第4段階（7～10か月）は、子音と母音による複数の音節をもつ反復から成る「基準喃語」（例：bababa, mamama等）が見れる。第5段階（11～12か月）では、「まんま」（食べ物）や「わんわん」（犬）等、「初語」が見れるようになる。

では、このような乳児期の子どもには、どのような歌を歌い掛けるのが適切なのだろうか。その1つとして、日本語に根ざした抑揚や旋律をもち、ふれあいを

12) 岡林典子『乳幼児の音楽的成長の過程-話し言葉・運動動作の発達との関わりを中心に-』風間書房, 2010, pp.30-31.



写真1-4 父親の歌い掛けに反応する
(2か月)

13) 本岡美保子「保育者の間主観的把握による情動調整場面のエピソード記述の分析－乳児はわらべうたをどう感じ、いかに喜ぶのか－」中国四国教育学会, 2019, p.7.



写真1-5 母親の歌を聴きながら踊る (1歳3か月)

14) 吉富功修・三村真弓編著『改訂4版 幼児の音楽教育法－美しい歌声をめざして－』ふくろう出版, 2019, pp.20-21.

いう段階を踏む。5歳児は、2番や3番がある曲でも歌詞を間違えずに歌い、さらには気持ちを込めて歌うようになる。また、斉唱だけでなく、交互唱も可能となる。

保育者の歌う姿は子どものモデルである。保育者として、どのような声の出し方や表情をすれば、子どもが心地よくのびのびと歌うことができるのかを探求することが大切である。

(3) モノと関わる・楽器を奏でることの発達

子どもは、身の回りにある音の出るモノや楽器を、振る、握る、叩く、擦る、引っ張る等、自分の体を様々に試しながら探索行動することで、多種多様

な音を生み出していく。子どもによって生み出されるそのような音は、一般的な意味合いでの音楽的な音、すなわちそのものや楽器を想起させるような音・音色とは限らない。また、子どもがモノを扱ったり楽器と関わる際には、上記のように様々な方法で音を出すため、一般的な奏法とは異なる場面も多く見られる。しかし近年では、このような姿を「子どもの音楽的な発達のはじまり」としてとらえる¹⁵⁾。以下に、具体的な子どもの姿を見ながら、その理由を探っていこう。



写真1-6 音の鳴るものを目で追う (2か月)

15) 丸山 慎「楽器への旅路、あるいは音への誘い－乳幼児期の音楽的発達とアフォーダンスの学習－」音楽教育学会実践ジャーナル, 15号, 2017, p.122.